

変化する環境の中で生きる グリーンランドのイヌイット

林 直孝 (カルガリー大学)

1. はじめに

アザラシの肉を食べたことがあるかい？ レバー肉の臭いを十倍ぐらいきつくしたような肉で、最初は喉を通らなかった。あの冒険家の植村直己でさえ、初めて口にした時は飲み込めなくて、胃と喉元を往復したらしい。でも、僕は、何回もグリーンランドに行って、地元のイヌイットの人たちと暮らしているうちにおいしく食べられるようになった。不思議なことに地域によって味が違って、東グリーンランドで食べたアザラシ肉の方が西地方で獲れたアザラシより脂が乗っていて旨かった。アザラシは、グリーンランドに住むイヌイットの人たちの伝統的な食べ物だ。彼らはもともと狩猟民族で、犬橇やカヤックを使ってアザラシや海鳥、セイウチ、白イルカ、鯨を獲っていた。漁業も盛んで、以前はタラ、今は甘エビやオヒョウ(halibut)を獲っていて、日本にも輸出している。カラスガレイって聞いたことある？ これはグリーンランド産のオヒョウのことだ。

僕は、2007年以來、グリーンランドで調査している。何を調査しているのかというと、気候変動の影響が、グリーンランドに住んでいるイヌイットの人たちの生活にどういった影響が出ているかということだ。気候変動の人間社会に及ぼす影響は地球のどこでもできるかもしれないけれど、北極圏で調査をしている訳は、極地、つまり北極と南極は、気候変動による環境変動が特に大きく現れる場所と言われているからなんだ。南極には人は住んでいないでしょう(越冬隊は住んでいるけど)。だから、僕のような人間社会に興味のある人間(文化人類学者)は、北極圏で調査をすることになる。北極圏というと、ホントの北極点だけを思い浮かべる人がいると思うけど、図1のように



図1. 北極圏に住んでいる先住民たち
(引用元 <https://arctic.ru/population/>)

北極点から下がってほしい北緯50度くらいまでを北極圏と呼んでいる。だから何も一面真っ白な大氷原に覆われた所ばかりじゃない。ちゃんと陸地もあるし、町もある。地図の中に聞き慣れない言葉(KalaallitとかSakhaとか)がたくさん並んでいるね。これらは先住民と呼ばれている人たちの民族名だ。北極圏には、こうした先住民たちがたくさん住んでいる。「先住」と呼ばれているくらいだから、ヨーロッパ人たちが来る前からそこに住んでいた。今は、カナダとかロシアみたいな大きな国家の一部に組み込まれているけれどね。グリーンランドも、18世紀(1721年)にデンマークに植民された。だから今でもグリーンランドのイヌイットたちもデンマーク国民として扱われている。でも、グリーンランドは面白い所で、デンマークという国家の下にあるんだけど、イヌイットたちは、自分たちの政府(自治政府)を別に持っていて、自分たちの言葉(デンマーク語ではなくてグリーンランド語)や独自の文化や風習(イヌイット固有のものと北欧文化に融合したものの

両方)を残そうとしている。つまり、そうした独自の文化や習慣を築いてきた社会が、気候が変わることによってどう変わっていくのか、ということに僕は興味があるんだ。

2. グリーンランド

グリーンランドは世界で一番大きな島だから、北の端から南まで2,500キロメートルぐらいある。どれくらいの距離かという札幌から出発して、日本を乗り越えて台湾の台北市まで行ってしまう。とても広いね。だから北に住んでいる人々と南に住んでいる人たちの生活は随分違う。イヌイットって言うと犬橇に乗っている人たちを想像する人が多いと思うけど、犬橇が使えるのは、グリーンランドでも北半分の地域だけだ。少し南に下がると犬橇を使う人はいない。グリーンランドに何人住んでいるか知ってるかな？ たった5万6千人だ。そのうちざっと1万人がデンマーク人だと言われているから、4万5千人ぐらいのイヌイットたちが住んでいることになる。グリーンランドの陸地の80パーセントは氷と雪で覆われているから、人は海岸沿いにしか住めない。その海外沿いに町や村が点在している。一番大きな町は首都のヌーク(Nuuk)で、人口は約1万7千人(図2)。二番目に大きい町は、シシミウト(Sisimiut)で人口5千人。僕は四番目(2017年現在)に大きいカコット(Qaqortoq)という町に一年間住んでいた(写真1)。それでも人口3千人。あとは、人口5百人ぐらいの村がここにポツン、3百人ぐらいの村があそこにポツンという程度だ。3年前、50人しか住んでいない人里遠い村に3週間行ってたことがある。町や村をつなぐ道路というものはグリーンランドにはないから、移動はモーターボートで海を行くか空をヘリコプターで行くしかない。これを読んでいる人たちは、電車やバス、車を使うのが当然だと思うから、想像するのが難しいと思うけど、天気が悪いと隣の町に行けないんだ。風が吹いたらモーターボートは転覆するかもしれないし、霧が出たらヘリコプターは前が見えない。僕は近くの村に行くのに、よく地元の人達のモーターボートに乗せてもらっている。「明日、隣村に行けるとしますか？」って訊くと、たいてい、『さあね…』って言われる。『だってここでは、天気がボスだから。』地元の人達は「明日、絶対行ける」なんてことはまず言わない。グリーンランドは天気が変わりやすいんだ。風もよく吹く。だから、行きたくても風が強くてなかなか行けないこともあるし、行ったは良いものの、一週間以上、そこから動けなくなるなんてことは珍しくない。明日の天気は明日になるまでわからない。そう言うものの、地元のイヌイットたちは、先の天気をよく読み、流氷をかわ



図2. グリーンランドの地図

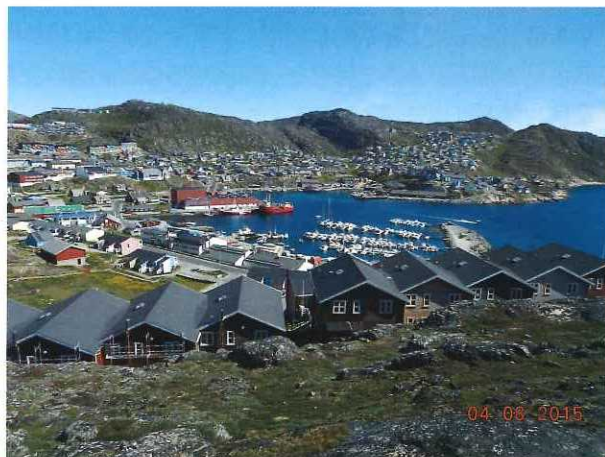


写真1. カコット町 (2015年8月4日撮影)

しながらスイスイとボートを操縦できる。こういう環境の厳しい所に住むには、小さい時から色々なことを自然から学んだり、道具に熟練したりしていないと住めないんだな、とよく思った。

3. 南グリーンランドの牧羊

3-1. 牧羊の歴史

カコットに2008年から2009年まで一年間住んだ主な理由は、牧羊業がどういった影響を気候変動から受けているか知りたかったからなんだ。グリーンランドで「牧羊？ イヌイットの羊飼いか？」なんて思う人もいるかもしれないけど、グリーンランドでは、牧羊が百年以上続いている(写真2)。いつを以て始まりとするかによるけど、大方の所、南グリーンランドで牧羊が始まった年は1906年とさ



写真2. カシアスックでの羊集め (2008年10月7日撮影)

れている。グリーンランドを支配していたデンマークが、アザラシ猟に代わる何か新しい生活の糧を教えてあげようとして、隣国のアイスランド（とフェロー諸島からも）から羊を持ち込んだことが始まりだ。デンマークは、子供の面倒を見る親のような気持ちでいたんだろうね。同じように植民した国が地元のイヌイットたちに牧畜業を始めさせようとした例はカナダにもアラスカにもある。でもうまく行かなかった。もともとイヌイットは狩猟民族だから、動物を飼うより、狩りをした方が性に合っていたのかもしれない。でも、グリーンランドではどういう訳か、牧羊に興味を持って、羊を飼い始める猟師や漁師が多かった。記録によると1930年代半ばまでに南グリーンランド全体で一万頭の羊が飼われていたらしい。デンマーク政府はカコットの隣にあるナーサ（Narsaq）という町に屠殺場を作って、食肉（大部分はラム肉、一部マトン）の生産を支援した。処理された肉は、そこで食品としてヨーロッパ（主にデンマーク）に売れるように、欧州経済共同体（ECC、今の欧州連合EUの前身）の定める品質検査を受けた。秋になると近隣に住む人たちが、ボートに羊を乗せてナーサの町にやってくるもんだから、2、3週間ほど町は羊で溢れかえった。それぐらい、牧羊は南グリーンランドの大事な産業にまで発展したんだ。

でも、その後、牧羊業はピンチを迎えることになる。グリーンランドの天気が変わりやすいことは話したね。とくに風はよく変わる。南グリーンランドでは、内陸の氷床から2、3週間おきに海岸に向かってとても強い風が吹く。地元の言葉でニゲ（nigeq）という。この風は暖かく乾燥しているので、この風が吹くと、冬でも氷点下15度ぐらいから、わずか数時間でプラス5度位までグンと上がる。日本で言えばフェーン風だ。それでこの風がやめば、今度は北風が吹いてきて、気温はまたガクンと下がってしま

う。気温が下がれば、融けていた雪や氷は凍るから一面、ツルツルだ。問題は、牧草地も氷で覆われてしまうことなんだ。羊は、氷を叩き割ってその下にある草を食べることはできない。気温が下がるうえに餌もなくて、多くの羊が冬場に餓死してしまった。最初に大きな被害があったのは、1948-49年。それから1956-57年、1966-67年、1975-76年と被害が続いて、その度に何千頭という羊が死んでしまった。時々すごく寒い冬があつてね。羊が大量死した年は寒かった冬に起きたんだ。こうなるとグリーンランドのイヌイットたちもなんとかしないといけないと考えるようになる。そこでデンマーク政府に働きかけて、新しい決まりを作った。それは、1) 冬の間、羊は羊小屋で飼い、野山に放してはいけない、2) 夏の間は、冬のために牧草を育てなければいけない、というものだ。この決まりは南グリーンランドの牧羊の形態をガラリと変えた。以前は、アザラシ猟やタラ漁をやっていた人たちが片手間で羊を飼っていた。だからだいたい一人の人が飼っていた羊の数は十頭から一五頭ぐらい。それが片手間で飼えるギリギリの数だった。これぐらいの数だったら、わざわざ羊小屋を建てたり牧草を育てる必要もない。夏でも冬でも羊を外で放し飼いにしておけば良いからだ。ところが、決まりで小屋を作らなければいけない、牧草を育てなければいけないとなると、10頭、15頭の数では採算が合わない。猟師や漁師は本業のアザラシ猟やタラ漁の方にかかりきりだからだ。採算を取るためには、羊の数は少なくとも百頭は必要だ。百頭飼うとなると、もはや片手間では羊は飼えなくなる。そこで牧羊業一本で生計を立てる人たちが出てきた。代わって、片手間で羊を飼う人たちはいなくなった。1950年前後には、少数の羊を飼う世帯が180ほどいたけど、2008年当時、羊を飼っている世帯は50世帯ほどまでに減った。でも規模は大きくなって、多い世帯では600頭ほど、少ない世帯でも200頭以上飼っていた。

3-2. 牧羊家たちの気候変動の見方

牧羊家の人たちに気候変動についてどう思ってるのか尋ねると、『気候変動はいまに始まったことじゃない。』ってよく言うんだ。いま、羊を飼っている人たちは、第三世代から第四世代だ。彼らは、お父さんやお爺さんから昔の天気のことをよく聞いているんだね。『研究者やマスコミは、温暖化、温暖化って騒いでるけど、1930年代の方がもっと暖かったって聞いているよ。』どういうことなんだろうって思って調べてみた。図3を見てほしい。赤い線は気温の変動を表していると思ってくれたらいい（実際は首都ヌークの年間平均気温の推移）。屠殺場では、毎年、処理した羊の頭数を数えている。それが黄色で示された線だ。処理

した羊の数がガクンと減っている年があるね。そうした年は、厳冬だった年と一致している。1980年代に、冬の間は羊を小屋に入れることが徹底されたから、それ以降、処理される羊の数はだいたい2万頭ぐらいで安定していることが分かる。もう少しグラフの年代を遡ってみよう。1900年の手前から気温が上昇傾向にあったことに気づかないかい？ グリーンランドでタラ漁が盛んだったことは冒頭で述べた。20世紀初頭、デンマークは、牧羊の推進の他に、グリーンランドでの漁業の商業化にも力を入れたんだ。グリーンランド沖は魚が豊富だからね。気温が上昇すると、海水温も上昇する。タラは冷たい水よりも温かい水が好きなんだ。だから気温が上がるにつれ、漁獲高は上がっていった。気温上昇がピークに達した1930年から1940年代にかけては、タラがたくさん獲れた。カコットやナーサはこの時期栄えて、南グリーンランドの中心都市になった。ところがそれ以降、気温も海水温も下降傾向を見せるようになると、タラはだんだん獲れなくなってしまった。ついに1970年代、グリーンランドのタラ漁は崩壊してしまった。『それまで沖に出れば、ボートいっぱいタラが獲れたのに、ある日突然、全く獲れなくなったんだ。』地元の人はそう話してくれた。(グリーンランドでタラ漁が崩壊した理由は、気候変動だけではなく、外国船による乱獲もある。) アザラシはタラとは逆で、温かい水よりも冷たい水が好きなんだ。1900年代からアザラシの捕獲高は下がってきていた。だから、結果オーライだったんだけど、デンマークが羊を導入してよかったんだね。猟師は、不足分を羊で賄えた(ただしどれだけ賄えたかは不明)。1970年代、タラに代わって今度はアザラシが獲れるようになった。海水温が下がったからね。面白いことにこの時期、タラを獲った漁師は、アザラシを獲る猟師になったんだ。そこにきてまた近年の温暖化だ。少しずつ、またタラが獲れるようになったと聞いているけど、漁獲高は以前には程遠いらしい。第三世代(50歳以上)の牧羊

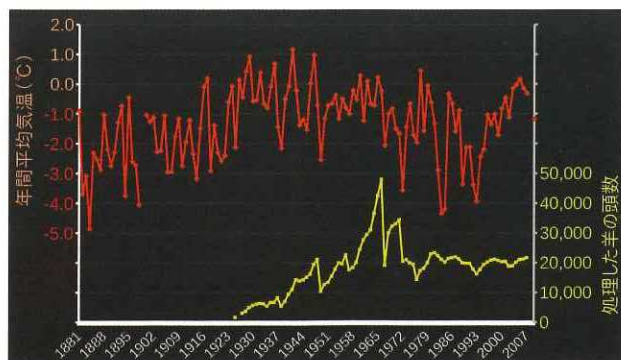


図3. グリーンランド北西部の年間平均気温(1881-2007年)と処理された羊の頭数(1925-2007年)

家たちは、こうした気候変動を実際に体験している。だから、多くの人が『ここ(南グリーンランド)では、気候はいつだって変化しているから、気候変動は新しいことじゃない』って言うんだね。

それじゃあ、もっと時代を遡ってみようか。僕は、南グリーンランドで20近くの羊牧場を訪ねた。牧羊家の人たちと牧場を歩きまわっていると、あちらこちらに大きな石の塊が散らばっているのを見かける。なんだろうと思って訊ねると、『それはバイキングの遺跡だ。』と言う。バイキングというと海賊みたいな人たちで、あちらこちらの船や町を襲って食料や金目のモノを分捕っていたというイメージを持っている人が多いんじゃないかな。確かにそういう蛮行もやった。でも、もともとは農民なんだ。ノルウェーの北の方にいた農民たちが土地を求めて、海を渡ってイギリスの北部のシェトランド島とかフェロー諸島、アイスランドなどの島に入植していった。それが9世紀まで。それからいったん気温が下がり気味だったけど、10世紀後半は温暖化傾向にあったから、海を渡りやすかった。それで、986年頃、南グリーンランドの今のカシアスック(Qassarsuk)という所にたどり着いた(図4)。ここを中心にバイキングたちは近くのフィヨルドの海岸に次々と入植して農園を切り拓いたんだ。イガリコ(Igaliku)という所には司教のための大聖堂を作り、カコットクロー(Qaqortukuloq)という所には大きな教会も建てた(写真3)。かなり大きな農園社会を作ったと予想されている。だから南グリーンランドのあちこちにバイキングたちの家や墓、牛舎の遺跡がたくさん見つかった。ところが、15世紀の中頃くらいに突如としてバイキング文明は途絶えてしまった。有力な説は、気候変動による影響だ。15世紀半ばから小氷河期とよばれている時代が始まって、気温が下がり始めた。バイキングたちは、牛や羊や山羊を持ち込んで、牧畜生活を営んでいた。寒いと牧草が育てられないね。だから気温の低下は、彼らの生活に致命的だった。バイキングたちはグリーンランドを去ってどこかへ移り住んでしまったが、消滅してしまったんだろうと言われ

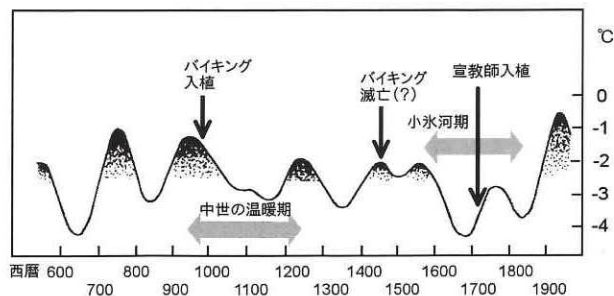


図4. グリーンランドの歴史的気温変化と人間活動の関係(553-1975年)



写真 3. カコットクロー（デンマーク語名バルス-Hvalsø）にあるバイキングの教会遺跡（2008年8月21日撮影）

ている。

どうしてこんな話をしたかというね、南グリーンランドの牧羊家の人たちは、自分の経験や親の世代の話からも、野外でよく見かけるバイキングの遺跡からも、気候はいつも変化しているってということがよく分かっているんだ。だから年配の牧羊家たちは、『気候はいつだって変化している。』って言うんだね。

3-3. 気候変動は単に温暖化だけではない

最近の温暖化で南グリーンランドの人たちの生活は確実に影響を受けている。例えば、南グリーンランドでは、今、ジャガイモを育てることができる。牧羊家みんながジャガイモを育てているわけじゃなくて、ほんの数戸だけだね。ある牧羊家が言っていたんだけど、1960年代、お父さんたちがジャガイモ栽培を試みたけれど、寒くて上手くいかなかったんだそうだ。でも、今では多い年には100トンぐらい採れたって言ってた。レタスや菜っ葉を育てる人もいる。それをカコットの町にある地場産市場で売ったりするんだけど、イヌイットの人たちはあまり買わないらしい。ルバーブは18世紀にすでに宣教師が持ち込んできたから土地の人には馴染みがあるし、自生しているアンジェリカはハーブティーにして飲んだりしてる。でも、最近の牧羊家の人たちが作っている野菜は、新しすぎて、どうやって食べていいかわからないらしい。むしろ現地にいるデンマーク人がよく買うって聞いた。イヌイットの人たちがよく食べる野菜といえば、ジャガイモ（主要なデンマーク食の一つ）、カブやニンジン（牧羊家たちが昔からよく育てている）ぐらいかな。

「温暖化して野菜が作れるようになったのなら、牧草を育てるのにも良いんじゃないか？」って思う人もいるかもしれない。でも、事はそう単純じゃないんだ。2015年の

夏、以前お世話になったカシアスツクの牧場を訪ねたら、その年、もう2ヶ月近くも雨が降ってなくて、牧草地は茶色くなっていた。これは最近の傾向のようで、夏は以前よりも暑くて、乾燥しがち。冬は雪が少ない上に、一度降ると大雪になったりするそうだ。冬には雪があったほうが良いんだ。雪が牧草地を覆ってくると、断熱材の役割を果たしてくれて、牧草を寒さから守ってくれるから。夏の乾燥は大問題だ。11月から4月までの半年間、500頭も600頭もいる羊の餌を夏の間に確保しておかないといけない。夏に牧草が取れなかったら、隣国のデンマークやノルウェーから牧草を買わないといけないよね。だから牧羊家にとっては経済的な大打撃だ。分かるかな？ 1970年代ぐらいまでは、冬の間の突発的な寒さが問題だった。でも、今は夏の乾燥が問題になったんだ。

4. 北グリーンランドの狩猟

4-1. セイウチ狩り

それじゃあ、今度はグリーンランドでも一番北にあるシオガパルク（Siorapaluk）という村に行ってみよう。グリーンランドで一番北ということは、世界最北の村ということになる。北緯77度の海辺にあるこの村は、ペリーやマロリー、植村直己のような有名な探検家が立ち寄ったことで有名な村だ。僕が最初にこの村に訪れたのは、2009年4月末日。その時、すでに太陽は24時間出っぱなしで全く沈まなかった。反対に冬の間は、一日中、太陽が出て来ない。まったく真っ暗かということでもない。月の光ってけっこう明るいから、満月の夜は、雪や氷の照り返しもあって明るいらしい（「らしい」というのは、僕は冬には行ったことがないからだ。秋から冬にかけては大学で授業をしないとイケないからね。）都会に住んでいる人たちは、街灯やネオンの光が明るすぎて、月の光が明るいなんて思うことはあまりないかもしれないね。この村は、ほんの30年ほど前まで電気が来てなかったからアザラシから採った油を使って明かりを灯していたんだ。僕が行った2009年当時、住んでいる人は70人ほど（これは統計上の話。実際にはもっと少なかった。）、犬はざっと見た感じ200頭ぐらいいた。どうしても分かるよね。この村では犬橇を使うんだ。もちろん、物資の輸送の時にはスノーモービルも使う。でも、狩りに行く時にはみんな犬橇を使う。スノーモービルは音がうるさいからね。獲物を追い散らしてしまう可能性がある。それにスノーモービルはガス欠になったら立ち往生してしまう。犬なら狩りで獲った肉を分けてあげれば、また橇を曳いてくれるから便利だ。

5月初旬、猟師の人たちにセイウチ狩りに連れて行って



写真 4. シオガバルク村でのセイウチ狩り (2009 年 5 月 2 日撮影)

もらった。セイウチというのは、とても大きい海獣でね、一頭、200 キロも 300 キロもある。だから一頭獲ると、家族の食料はしばらく賄えるし、犬の食料としても随分保つ。写真 4 はその時のものだ。僕は手前の橇に乗って凍った海の上を渡っている。前にいる橇は何か曳いているね。モーターボートだ。どうしてなんだろうと思っていると、前方に広がっていた氷原が切れた。そこで今度は曳いてきたモーターボートに乗り換えたんだった。そのあと流氷の漂う海を走ること 2 時間。氷の上で昼寝をしていたセイウチを 2 頭、鉄砲で仕留めた。獲物が獲れたらすぐに流氷の上で解体だ。猟師の人たちは手慣れたもので、象みtainな巨大なセイウチを見る見るうちに解体して、ブツ斬りの肉の塊をボートに積みこんだ。村に帰ったのは夜中の 2 時。でも太陽がずっと出ていたから夜になっていたことに気づかなかった。出発から帰宅まで実に 17 時間の行動だった。

4-2. 40 年前と今の気候の違い

この村は世界最北の村ということもあって、昔からよくテレビ局の取材班やジャーナリストがこの村に来て、ニュース番組や記事を作った。1970 年代には、日本テレビ局の取材班がここに一年間住んで、すごく良いドキュメンタリー番組を作った。今から見れば、当時の海氷の様子や村の人たちの生活の様子を伝える貴重な記録映像になっている。その番組の資料を見ていたら、面白いことに気づいた。当時、セイウチ狩りは 2 月中旬から始まっていた。2 月の中旬というと、ちょうど引っ込んでいた太陽が顔を見せ始める頃だ。(太陽は 10 月下旬から上がって来なくなるから、それから約 4 ヶ月間太陽なしの生活が始まる。) 村の人たちは 2、3 家族でチームを組んで、氷で覆われた海の上を犬橇で移動して、狩猟のためのキャンプ生活に入る。どうやって獲るかというね、まず、氷原のちょっと小

高い所に上がって辺りを見渡す。氷原というのは、スケートリンクみたいに真っ平らじゃなくてデコボコしているんだ。それでセイウチの呼吸孔が氷の表面にないか探す。セイウチは肺呼吸しているから、長いこと海の中に潜っていられない。だから時々息を吸いに上がってくるんだ。その上がってきたセイウチを銚で刺して仕留めるんだよ。1976 年 2 月から 5 月にかけて、村の人たちは数回の狩猟キャンプを行ったことがテレビ取材班の資料から分かる。最後のキャンプ地は、5 月中旬に村から 20 キロ沖合に出た所だった。なにか気づかないかい? 犬橇を曳いて沖合いでキャンプ地を張れたということは、今から 40 年前は、5 月でも海が凍っていたということだ。僕が行った 2009 年 5 月には村の位置する入江から少し出た所でぽっかり海が口を開いていた。これは、ここ 40 年ほどで春先の村の景観が大きく変わったことを示している。

以前なら、10 月の下旬から海は凍り始めて、6 月ぐらいまで海は氷で覆われていた。でも今は、12 月まで氷が張らないし、4 月にはもう村のすぐ脇まで氷が壊れて海が迫ってくる。冬場でも以前ほどしっかりした氷が張らないから、危なくて冬でも橇が使えないことがままあるらしい。だから、もう、冬場に犬橇を使ってセイウチを獲ることはしないで、春先に獲るようになったんだ。以前は半年、年によっては 8 ヶ月も犬橇を使うことができたけど、今は 4 ヶ月ぐらいしか使えないらしい。彼らの生活が大きく変わったことは想像に難くない。

4-3. 北極圏で生きていくための知識や技術

こんなことを書くと、気候が変わると、もう犬橇を中心にした狩猟文化が消えていくんじゃないかと嘆く人もいるだろうね。僕はそうでもないと思う。地元の人達は、その場所で生きていくのに必要な知恵や知識、技術を持っている。昆虫採集をしたことがあるかな? 植物と違って虫は動き回るよね。だから、虫を捕るためには、虫がいる場所に行かないと捕れない。行ったとしても、発生する時期があるから、その時に行かないと捕れない。動物も同じだ。地元の人達は、白イルカなら白イルカ、ジャコウウシならジャコウウシのいる場所、獲れそうな時期をよく知っているんだ。だからセイウチが獲れなかったら、アザラシを獲ればいいし、アザラシが獲れなかったら、陸に住んでるトナカイを獲れば良い。氷が解けて橇が使えなかったら、上で説明したようにボートを使えば良い。こうやって臨機応変に対応していつている。こうした知識や知恵、機転は一朝一夕には身につかない。長年の経験や、親や村の人たちから聞いた話を通して培われていくものなんだ。だから、一人前の猟師になるためには時間がかかる。猟は決して易

しい仕事じゃない。僕は小学校から高校まで12年間の義務教育、人によっては、大学なんかに行って更に長いこと学校に通って社会に出るのに必要なことを学ぶよね。猟師になるにも、やっぱりそれぐらい長い時間が必要だ。鉄砲の使い方、ボートの操作方法、犬の調教の仕方、橇の修理、天気を読み方等等、様々なことを自然や村の仲間から学ばないといけない。

4-4. 狩猟の意味

もちろんグリーンランドには狩猟をしない人たちはたくさんいる。町役場で働いている人もいれば、商売をやっている人もいる。でもこういう人たちの生活にも狩猟文化は根ざしている。例えばタラの干物、アザラシ肉や鯨肉などの伝統食、ボート遊び、夏の終わりの野イチゴ摘み、余暇にするアザラシ狩りやトナカイ狩り、アザラシの皮を使った伝統衣装等々。こういう所が心の拠り所になるんじゃないかな。

グリーンランドの文化は、小さな集落の中の人の繋がりが、地域の繋がりを中心に発達していったものなんだ。狩猟は人の繋がりの要になる。狩りを通して、村の人たちと関わり、狩りを通して自然から様々なことを学び、狩りを通して物の見方や生きがいを見つけていくんだ。だから、狩りは単に食べ物を得るための方法じゃないんだよ。僕たちは食べ物が欲しかったらスーパーマーケットに行って買い物をするよね。でもこの人たちは、まず天気を読むことから始まる。天気が良くて「行ける」と思ったら、厚手の服を来て、防寒靴の靴紐を縛る。それから犬の首輪に付いている紐を橇に結びつけて出発だ。獲物が獲れなかったら何日も氷原を移動して獲物を仕留める。一人で行くこともあるだろうし、仲間と協力しなきゃいけないこともあるだろう。獲れた肉は仲間や村の人たちと分け合う。こうやって人と人の絆が深まっていくし、自分が生きていく支えも培われていく。だから食べ物を獲る、という行為はそれだけでなく、生活の全てに関わってくる生業なんだ。都会で暮らしている僕たちの生活とは随分違うね。

5. 政治的なこと

気候変動が人の生活におよぼす影響を考える時にみんなが忘れがちなことを付け加えておきたい。それは政治的なことだ。地元の人たちがどんなに知恵や技術を駆使しても、機転を利かせてピンチを乗り越えようと努力しても、

変な決まりや社会のシガラミがあったら、乗り越えられるピンチも乗り越えられないよね。例えば、グリーンランド政府は猟師に対して、動物ごとに捕獲制限をかけているんだ。今年、セイウチは何頭以上獲ったらダメ、とか一日に撃ついい海鳥の数は何羽までとか。こうした制限は猟師の人たちにとっては足枷になっている。もちろん政府はいじわるでこんな決まりを作っているわけじゃない。動物の個体群を守るために作った決まりだし、猟師の人たちもそれは分かっている。でも猟師の人たちと話をしているうちに、こういう決まりは猟をよく知らない人たちが作っているんじゃないかと思うようになった。将来、もう少し猟師の人たちの言い分も組み込んだ決まりができれば良いかなと思ってる。

6. おわりに

これは僕の経験なんだけど、北極圏の景観は常に変化している。たった一晩で入江は流水で埋め尽くされたかと思うと、たった数日で跡形もなく流されてしまう。数日続いた晴天も、突如として突風が吹きぬける荒れた天気になってしまう。猟師や漁師たちは、こうした変わりやすい環境の中で巧みに生きる術を身に付けてきた。牧羊家たちは、気候は歴史的に変化していることを感じている。こうした変わりやすい環境の中で生き抜くためには、状況を的確に判断して、瞬時にベストの解決策を自分で見つけることだ。変化は、ピンチにもチャンスにもなるんだ。グリーンランドに行って、イヌイットの人たちと一緒にいると、「今」を大切にこなしていくことが大事なんだな、と思えてくる。そうやって一つ一つ物事をこなしていくと、思ってもいなかった未来が拓けてきたりするかもしれない。これは僕たちの社会でも同じことなんじゃないかな。こうしたことをもっと学びたいから僕はまたグリーンランドに行く。そしていつか、もっと良い暮らしができる方法をグリーンランドの人たちと一緒に考えることができれば良いと思っている。

(注記) グリーンランド語の表記は、アルファベットをローマ字読みにするのではなく、耳で聞こえた通りの音に従った。

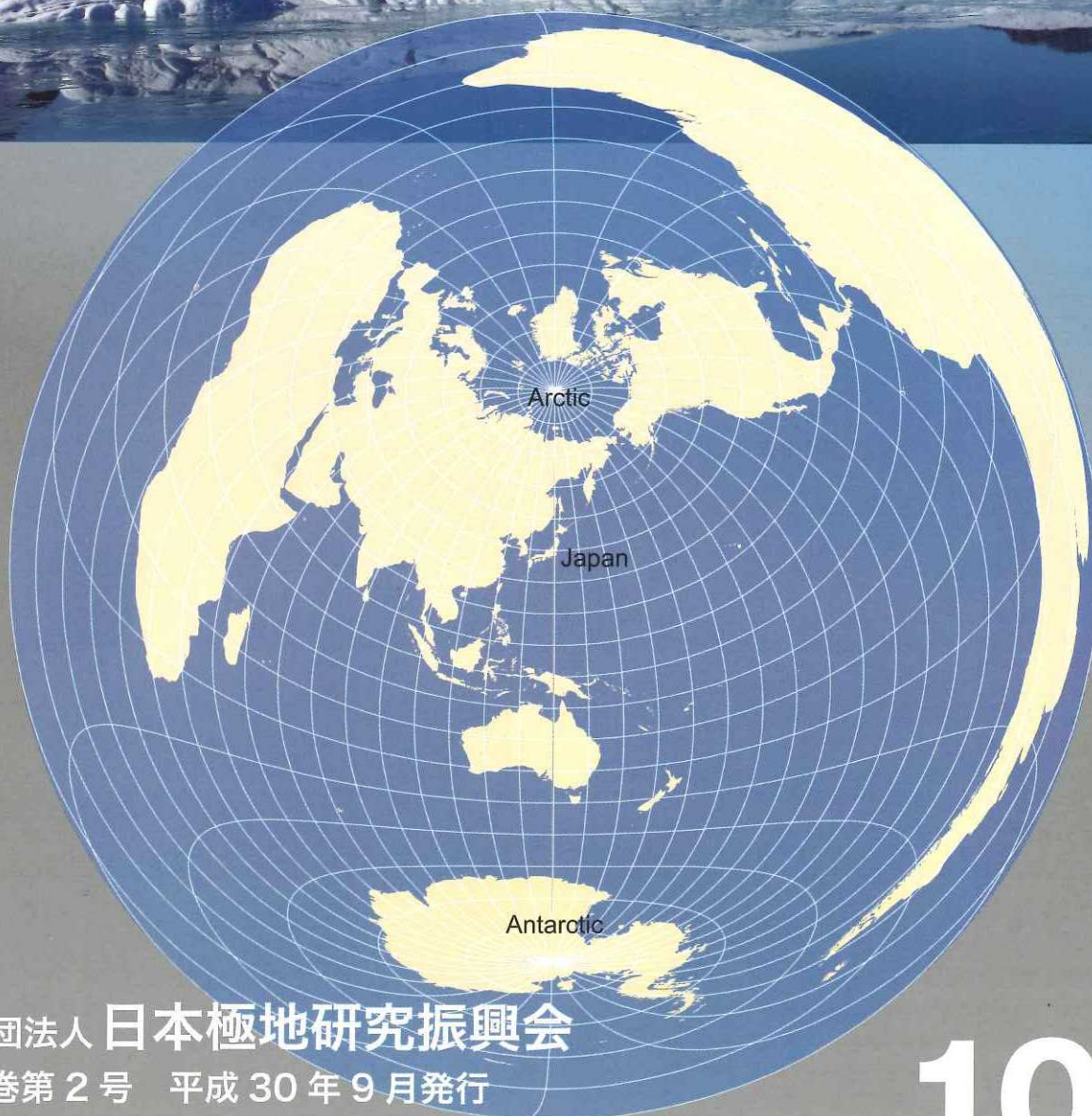
引用文献は紙面の関係で割愛した。興味のある方は、naotaka.hayashi@ucalgary.ca まで。

(2018年6月18日受付)

極地

南極と北極の総合誌 POLAR NEWS

特集「北極・南極から迫る地球温暖化」



公益財団法人 日本極地研究振興会

第54巻第2号 平成30年9月発行

JAPAN POLAR RESEARCH ASSOCIATION

Volume54 Number2 September 2018

107

目 次

巻頭言

地球環境問題への取組み—樹を植えるがごとく家をつくる—

作尾徹也 1

特集「北極・南極から迫る地球温暖化」

北極と南極を比較してわかる地球温暖化

山内 恭 2

北極域の温暖化とそのしくみ

吉森正和 8

暖かい北極・冷たい大陸—日本への影響と予測可能性—

猪上 淳 12

北極と南極における近年の氷河氷床変動

杉山 慎 16

グリーンランドと南極の氷床コアが語る過去の気候・環境変動

東久美子 20

変化する環境の中で生きるグリーンランドのイヌイット

林 直孝 24

温暖化と北極に暮らす動物たち—飢えるホッキョクグマ—

神保美渚 31

南極の気候変化とペンギン

高橋晃周 35

北極探検の足跡と極地観光—北極への飽くなき挑戦—

高橋修平 38

南極観測隊の活動

第59次南極地域観測隊の計画概要

土井浩一郎 50

南極越冬隊の調理の工夫—国内との違い—

渡貫淳子 60

極地探検史

白瀬隊の日本初南極探検映像公開と学術展示に関する考察

大島ひとみ 67

多彩な探検家ウィルキンスとその時代の極地飛行

石沢賢二 74

トピックス

南極

石沢賢二 83

北極

兒玉裕二 86

科学館探訪

南極に一番遠くて一番近い 稚内市青少年科学館

永井俊彦 91

エッセイ

南極観測と陸別しばれ研

浜田 始 96

新刊紹介

97

日本極地研究振興会だより

102

極地 第54巻第2号 (通巻107号) 2018年9月1日発行

発行 公益財団法人 日本極地研究振興会

住所 〒190-0023 東京都立川市柴崎町2丁目5-2-503

電話 042-512-5357 FAX 042-512-5358

ホームページ <http://kyokuchi.or.jp/>

問合わせ・ご注文は info@kyokuchi.or.jp

定価 本体1000円+税

印刷所 創文印刷工業株式会社

ISBN4-9909160-4-6

C0040 ¥1000E

定価 本体1,000円+税



9784990916046



1920040010007